# ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(3)
## ～ 過去の映像は、未来を予見する ～

吉　田　和比古

「外国語の知識のない者は、母語についてもわかってはいない」
～Johann Wolfgang von Goethe～

## は　じ　め　に

1997年7月にNHKで放映された海外のシリーズ番組「市民の20世紀・引き裂かれた平和～第2次世界大戦」は、次のようなナレーションで始まる。

「1936年のイギリスの近未来映画「Things To Come（来るべき事態）」は、新たな戦場の姿を描いている。そこには人々が恐れていたものが表れている。以前とはまったく違った戦争。爆撃機の大群が市民を空から襲う戦争である。その一年後、予見は現実となる。日中戦争で日本の航空機が上海（シャンハイ）を爆撃した。スペイン内戦では、何千という市民が空襲の犠牲になった。世界各地で戦争の様相が変わりつつあった。これからは市民が標的となるのである」

2001年9月11日、アメリカで起きた「同時多発テロ」では、3000人近いニューヨーク市民が一瞬のうちにテロ攻撃の犠牲となり、1か月後の10月には、テロリストの首謀者が潜んでいると想定されたアフガニスタンに対する報復の空爆が始まった。当然ながら、大勢の市民が

その巻き添えになった。過去の映像記録は、航空機と爆弾という空からの脅威を絶えず映し出し、地上で恐怖に逃げまどう無力な市民を映し出している。そして、そうした光景は、戦争遂行のために不可欠なさまざまな大義名分を掲げて、今もなお反復され続けている。第2次世界大戦前夜、人々が恐れていたのは空襲だけではなく、毒ガス攻撃も生命を脅かす恐るべきものであった。2002年の冬、アメリカのソルトレーク・シティで開催される冬季オリンピックに参加する日本の選手団は、テロ攻撃を警戒して、ガスマスクを持参していった。起こりうる最悪の事態に対する備えとしてである。そしてその姿は、映画「Things To Come」の中で、ガスマスクを持ち歩くロンドン市民の姿と重なっている。戦闘行為に直接関与しない市民を攻撃すべきではないという「倫理観」は、すでに第2次世界大戦において失われた。

同時多発テロの発生により、日本の民間衛星テレビ放送WOWOWでは、予定されていたアメリカ映画「マーシャル・ロー（'The Siege' 1998年）」の放映を延期した。この映画のストーリーは、ニューヨークを舞台にそこで起きたイスラム原理主義者の自爆テロを扱うという、実際に起きた事件とあまりにも酷似していたことによる。映像は、たえず未来を予見する。本稿で取り上げる映像資料は、そのほとんどが「記録映像」であるが、それはただ単に過去の事実を視覚的に知るための手がかりとなるだけはない。それらの映像は、その映像が撮影された時点よりもはるかに未来の時間を生きている我々が、今日の歴史的状況や、事象相互の文脈や因果関係を読み解こうとする時に、手がかりを提供し続けているのも確かなことである。〔これまでと同様に、番組に関する個人的な見解やコメントは、◆の後に述べられている。〕

# ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(3)

## 1996年（平成8年）

### 174.「自由の種をまく～子安美知子・フミ　シュタイナーとの25年」

〔1996年8月25日　『素晴らしき地球の旅』・BS2・90分・製作：NHK〕

ドイツ文学者子安美知子氏は1960年代の初めに、研究のためドイツに留学した。南ドイツ・バイエルン州の州都ミュンヒェン、ここの小さな学校に一人の日本人小学生が入学した。美知子のひとり娘のフミである。番組の中で、子安母子はかつてフミが学んだシュタイナー学校を再び訪れ、独自の教育システムについて紹介するところから始まる。シュタイナー学校は、ルードルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner　1861－1925年)によってシュトゥットガルトの地に1919年に創立され、現在は世界中で650校にまで広がりを見せている。シュタイナーは教育の目的は、人が真の自由を獲得することだと考えた。自由な個人とは自分自身で物を考え、そしてそれを実現できる力を備えた人間であり、彼はそうした人間を独自の教育システムで作り上げようとした。番組の中のインタビューで、自由ヴァルドルフ学校連盟代表のシュテファン・レーバー氏は次のように語る。「子供が自分自身でどう育ちたいか、何になりたいのか、自らが決められるような、そういう力を育てることにある。これからの時代はそういう視点から子供たちを教育しないといけないだろう。人間はすべて一人一人が謎と言われる。教師とはその謎と付き合い、それをどう解いていくかという恐ろしく困難な重い課題を背負った存在である」番組は、さらにシュタイナー教育ゆかりの地であるスイス・バーゼル近郊のドルナッハや、教育理念の社会的実践形態としての健常者と障害者が共に働く「ヘーエンベルク共同体」、自然食品の普及活動、従来の化学薬品(Allopathie)ではない自然薬品(Ho-

möopathie）の浸透などについても紹介されていく。そして番組の後半では、今日の産業国家における自然回帰志向の先取りとも言える理念をシュタイナー教育が含んでいることが丹念な取材で示されている。◆現在日本では、小学校から大学にいたるまでさまざまな形での教育の改編が進行中であるが、そこで先行するのは教育の効率化と経済性であり、シュタイナーに見られるような明確な哲学に立脚した教育理念はその片鱗も見られない。教育制度が国家百年の大計の一部であるとするならば、現在の小手先の技術論的改編は、遠からず破綻をきたすことは明白である。それと同時に、かつての文部省そして現在の文部科学省の教育改革が今だかつて成功したことがあるのかどうかを明確な形で検証していく作業も同時に必要であろう。

175.「ナチスが襲った日～フランス・オラドゥール村」〔1996年8月26日・ETV・45分　製作：NHKエンタープライズ／リアルタイム〕

フランス中西部のリモージュ市の近くのオラドゥール村。毎年6月10日になると村をあげてある記念式典が行われる。それは村人にとって忘れられない体験と記憶を呼び起こす式典でもある。第2次大戦末期の1944年6月10日、村は突如ナチス親衛隊に襲撃された。女性や子供は村の教会に閉じ込められ生きたまま焼かれた。虐殺を逃れた人々は、廃墟と化した村を当時のまま保存してきた。6月6日の連合軍のノルマンディー上陸作戦開始からわずか4日後のことであるが、フランス国外にはあまり知られていない惨劇の史実と生き残った人々の悲しみの歳月を、番組は冷静な映像文体で淡々と描いている。生き残りの一人であるロベール・エブラス（71歳）さんは、虐殺の事実と自らの体験を後世に伝えようと村の語り部となることを決意し、3年前に「惨劇」と題する本を出版した。オラドゥールのできごとはドイツではあまり広くは知られていないが、ドイツ人

写真家マルティーン・グラフさんは写真集「オラドゥール」を出版してデュッセルドルフで展示会を開催した。加害国ドイツでも今ようやくこの事件に光が当てられようとしている。この虐殺事件の裁判は、戦後2度開かれた。最初は1953年にボルドーで行われ、事件にかかわった軍曹以下21名の元親衛隊隊員が出廷し、一人を除いて全員が有罪の判決を受けた。そして村を襲撃した親衛隊のライヒ師団を指揮した最高責任者ラマディング中将は、ドイツにとどまったままで死刑を宣告される。彼はしかし一度もフランスの法廷に立つことはなく、1971年に死亡するまでドイツ国内で会社を経営していた。二度目の裁判は、1983年当時の東ベルリン〔旧東独の首都〕で行われた。これはただ一人事件を語ることのできる現場指揮官の一人バルト中尉が事件から37年を経て逮捕されたことによる。判決は終身刑で、彼は今もなおベルリンの刑務所に服役中であるが、虐殺の理由については何も語ってはいない。生き残りの一人ジャニーヌ・レノーさん（75歳）は番組の中で次のように語る。「初めのうちはドイツ人は皆死ねばいいと思いました。でも今は世の中の変化に慣れて・・・もう同じではありません。若い人たちは私たちの世代のことをあまり知らないでしょう。ドイツ人も良い人と悪い人がいる。あれはなによりもナチスがやったのだと考えるべきでしょう」。そして「惨劇」の著者ロベール・エブラスさんは次のように語る。「虐殺のあと考えたのは復讐でした。でも時が考えを変えました。私も年をとりました。今も私の心は痛みます。私たちを苦しめたドイツ人を見ると、こいつはあの日オラドゥールにいたかも・・・と思ったりします。許すことはしません。忘れてはいけません。でも次の世代に仕返ししようとは思わない。ただ彼らは自分のしていることがわかっていたのかどうか、私はそれを問いたいのです」番組のナレーションは最後に次のように締めくくられる。「何のための殺戮だったのかーそれすら分からないままに時は過ぎていく。癒さ

れることのない悲しみの中で人々はあの惨劇を語り続けていくしかない。」

◆毎年８月になると第２次世界大戦や太平洋戦争にまつわる数多くの番組が放映され、この番組もその一環であることを考える時、何よりも戦争の被害者はその惨劇を容易に忘却することはなく、深い心の傷を抱いて生きつづけるしかないという当たり前の事実を目の前に突きつけられて、視聴者はたじろがざるを得ない。それと同時に、最近の日本で頻発する企業不祥事の際にしばしばテレビの中で見るように、「過去の事実を水に流して、懺悔の意思表示として公衆の面前で深々と頭を下げれば、それで事足りる」という体質が日本社会の特徴で有り続けるのであれば、我々は絶えずそうした事実を反復的に目の前に提示しつつ、過去を振り返らなければならないだろう。筆者はこの原稿を作成しているのは2001年の９月中旬から10月にかけてである。言うまでもなく、現在メディアはこぞってアメリカで発生した同時多発テロ事件を取上げ、それに対するアメリカや日本などの対応がいかに行われているかという報道が主流を占めている。売れさえすれば何でも書こうという商業主義にどっぷりと毒された一部の週刊誌の見出しには「第三次世界大戦」などという大衆煽動的なフレーズが軽々しく引用される始末である。しかし、こういう時にこそ番組の中のレノーさんやエブラスさんの言葉は、じっくりと重く受け止めてみるべきであろう。

**176. 関連映像資料⇒「史上最大の作戦」**（"The Longest Day"）1962年・米、製作：ダリル・F・ザナック、監督：ケン・アナキン／ベルンハルト・ヴイッキ／アンドリュー・マートン、原作：コーネリアス・ライアン。

第二次世界大戦のハイライト、ノルマンディー上陸作戦の全貌をパノラマ形式の壮大なスケールで描いた戦争大作。戦争は、ハリウッド映画に絶えず物語（ストーリー）を提供し続けているが、この映

画で注目されることは、連合国の敵国であったナチス・ドイツのシークエンス（一連の場面）の撮影のために、ドイツの映画監督B・ヴィッキを起用していることである。彼の参加により、この映画は「連合国＝善、ナチス＝悪」という単純な図式の娯楽映画の域を脱し、セミ・ドキュメンタリー的な性格を獲得したといっても良く、将来的には20世紀における人間の戦い方の風景を視覚的に残した歴史研究資料となるだろう。＜モノクロ　178分＞

◆6月6日に，上陸作戦が始まった時に南仏にいたライヒ師団は，急遽ノルマンディーまで北上することになり、その移動の途中でオラドゥール村の惨劇が起きた。ナチスに抵抗するレジスタンスの活動家の摘発のために、あえて村人全員を虐殺の対象にする必要があったのかどうか、あるいは連合軍がいよいよフランスに上陸してきたことによる集団ヒステリーが親衛隊隊員を襲ったのか。20世紀の戦争が「空爆」などにより、いかに簡単に市民すなわち非戦闘員を巻き添えにしてしまうかを考えると憂鬱にならざるを得ない。そして一般住民を巻き込むかも知れない戦争が21世紀になってもなお継続しそうな予測は、その憂鬱に一層拍車をかける。

**177.「ドイツ・生と死を見つめる故国」**〔1996年9月7日・『世界わが心の旅』旅人・アルフォンス・デーケン（哲学者）、ナレーション：青木裕子　BS2・45分〕

上智大学教授でカトリックの神父でもあるA・デーケン（1932－）氏は、1960年27歳の時に来日し、以来37年間日本に暮らしながら「死の哲学（死生学）」をライフワークにしてきた。彼は、古くから人々は家族の一員を看取るなかで、自然に「死の準備教育」を受けていたと語る。だが科学や医療技術の発達につれて世界的に「死のタブー視」が広がり、「死」を学ぶ機会が減ってしまったと同氏は指摘する。今回の帰郷の旅は、氏の研究の原点ともなった故郷での少年時代の出来事をもう一度思い起こす作業となる。氏の故郷は、北ド

イツ・ニーダーザクセン州の人口1万人の小さな村エムステッド。氏が8歳の時4つ年下の妹を不治の病であった肺がんで亡くし、少年時代に連合軍の空襲によって目の前で幼な友達の死を目撃する。妹と親友の早すぎる死という人生の不条理に絶望した氏は、聖マルガレーテ教会で神に祈りを捧げることで悲しみを乗り越えようとした。その時テオドール・ヘルストマン神父の教えと励ましが氏の心の支えとなった。こうした少年時代の体験が、氏を生涯にわたり死の哲学に向かわせる出発点ともなった。デーケン教授は数年ごとに故国ドイツを訪ね、自らの原点を再確認している。番組では、デーケン教授は青春時代にゆかりの深い各地を訪れる。学生時代を過ごした町ミュンヒェンでは、バイエルン州立図書館、ホスピス、ターミナルケア（終末医療）の原点を学んだ聖フランシスコ病院を訪ね、その後アーヘンのホスピスに向かう。旅の終わりには、ふたたび故郷エムステッドで家族のお墓参りをし、また第二の故郷である日本に戻る。番組の最後でデーケン教授は次のように語る。「ふるさとドイツで学んだことを自分の原点として大切にしたいと思います。私自身は、去年（1995年）東京でがんの手術を受けました。そのときは私自身の死について随分考えさせられました。これからの人生は自分が選んだ第二の故郷である日本で過ごしたい。日本に骨を埋めるつもりです。今度のドイツへの旅は、自分の精神的なルーツの再発見でした。つまり死とどう向き合うかというテーマに関してもう一度見つめ直しました。これから日本に戻ってライフワークをできる限り完成したいと思います。」デーケン教授の故国ドイツの旅は終わったが、しかし残された人生をより良く生きるために、生と死を見つめる旅はこれからも続く。◆現代文明は『生こそが最上の価値』とし、欲望の拡大・快楽の追求に奔走してきた側面がある。その中では老いや病気も、科学や先端医療によって克服できるものという錯覚が生じたのではないか。その結果「死」は『科学の敗北』

を意味し、同時に忌むべきものとなる。最近、学生の一般教養科目として死を考える講義に人気が集まっていると聞く。これは教科書で知識を伝達するのではなく、死をテーマにしたビデオを見たり討論をしたりして、自分自身の問題として学ばせるという形で、視聴覚教育の形態を取っていることが特徴の一つでもある。死期の迫った大学教授が自宅で行った最後の授業を描いた『モリー先生との火曜日』などは、こうした授業の中で教材として用いるのは大変有効であろう。

⇒178. 関連映像資料「モリー先生との火曜日（"Tuesday with Morrie"）」〔アメリカのTVムービー番組で主演はジャック・レモン、2000年7月　NHK海外ドラマ・90分〕

179.「ドイツに生まれたけれど　(Jugendliche Ausländer in Deutschland)」〔1996年10月14／21／28日・ETV『ドイツ語講座上級編・ドイツ・若者たちのプロフィール』の中のテーマ・20分×3回〕

ドイツは第2次大戦後、経済復興のために数多くの外国人労働者（Gastarbeiter）を、文字通り「ゲスト・ワーカー」として受け入れてきた。そして彼らの次世代すなわち2世がドイツで生まれ、教育を受け、ドイツ的生活様式の感性を身につけながら、それでもやはり本来の両親の祖国とのジレンマの中にある若者たちが急増している。番組では、そうした二重のアイデンティティに悩む若者たちの本音を語り合う。ドイツには外国人が690万人いる中で、そのうち20年以上の居住者が150万人、15年以上がさらに100万人以上いると言われる。これら数百万の人達の市民権、そしてドイツで生まれた彼らの多くの子供たちの問題が番組のテーマとなっている。1994年以降ドイツでは外国人が10年以上滞在するとドイツ国籍を申請することが可能である。しかし、それ以前から期限が来てもドイツの国籍を申請する人は少なく、実際に得ている人の数は1997年から1990年まで25万人にすぎない。なぜならば、ドイツ国籍を取得する

際には古い国籍を放棄しなくてはならないからである。また故国での権利ばかりではなく、血縁、そして何よりも伝統や風習までも国籍を捨てることで失ってしまうのではないかという不安も大きく働いている。しかし一方では第二の故国とも言えるドイツで、より経済的・政治的な関与を行いたいという希望も理解できるところである。特に自分たちマイノリティの立場を代弁する人を選ぶための投票権が焦眉の問題となっている。このジレンマを脱する一つの案が「二重国籍」を認めるというものである。この案へ反対する人は二重国籍の取得に伴って二重に生じる多くの義務（例えば納税）、責任負担の遂行可能性についての懸念を根拠にしている。その極端な可能性が二つの国が敵対的な国際関係に陥った場合である。

**180.「ドイツ・笛吹き男との出会い」**〔1996年10月５日・『世界わが心の旅』旅人：阿部謹也（歴史学者／ドイツ中世史）ナレーション：岸田今日子・BS２・45分〕

1284年のある日のこと、北ドイツのハーメルン（Hameln）の町に斑（まだら）色の服を着た笛吹き男（Rattenfänger）が現れ、巧みな笛の調べで誘い出したネズミの大群を町から追い出した。しかし、ネズミの災難を免れると町の人々は約束の報酬を払おうとしなかった。笛吹き男は、仕返しに130人の子供を誘い出し、山に着くと姿を消したという。よく知られた「ハーメルンの笛吹き男（ネズミ取り男）」という昔話である。阿部氏が歴史研究者を目指した頃は、日本では歴史の研究は、官製アカデミズムや特定のイデオロギーに基づいた歴史観の記述が主流であり、阿部氏のように民衆を中心とした社会史は中央の学会からは全く評価されていなかった。やがてドイツで学んだ阿部氏は、「リューネブルク手書き本（1430～50年頃）」などの中世の文献を丹念に読み込んで、子供のころに読んだおとぎ話が歴史的な事実に基づいていることを突き止めた。そして「ハーメルンの笛吹き男～伝説とその世界～」〔1972年、平凡社〕

の発表により、中世ヨーロッパ歴史研究に独自の領域を開いた。番組の中で阿部氏は語る。「私にとって歴史とは自分の内面に対応する何かであって、自分の内面と呼応していない歴史を私は理解することができない」子供たちの失踪の原因の一つと考えられているのが、ドイツ人の「東方植民説」である。阿部氏はその足跡をたどり、かつての東プロイセンのマズール地方（現在はポーランド領）を訪ねる。この地方は、かつてドイツ語名で「オステローデ(Osterrode)と呼ばれた地域で、中世のドイツ騎士修道会の城も残されている。第2次世界大戦中で破壊されたこの城は、現在ポーランド人によって修復が進められている。阿部氏は、ドイツ中世の東方植民の歴史を研究していく過程で、はからずも笛吹き男の伝説と出会うことになった。番組の最後で阿部氏は語る。「自分がどこにいるのか知りたい。最終的にいずれは死ぬことになるが、その時に自分が生きたということを自分の中では確信しておきたい。学問と芸術を分けること自体に意味はないと思う。いろいろな分野の人との対話をすることに意味があり、そうした他の分野の人と話を深めていくときに、自分は何かという問いにもう一度立ち戻ることになる」

⇒関連文献：

「世間とは何か」　阿部謹也，講談社新書1955年。

「日本社会で生きるということ」阿部謹也，朝日新聞社1999年。

**181.「映画監督アンジェイ・ワイダ～映像証言の戦後史～」**〔1996年10月10日・『知への旅』・ETV・45分　製作：YLE／フィンランド〕

名実ともに戦後のポーランド映画を代表するアンジェィ・ワイダの貴重なフィルモグラフィー。フインランドのテレビ局 YLE が、ワイダの新作「聖週間」の撮影風景を織りまぜながら、彼の映画芸術表現の歴史をたどる。番組の中で、ワイダは次のように語っている。「かつてのポーランドで、創造的な活動をするときには『象徴主義』的な考えがとても重要でした。なぜなら私の映画においても、ポー

ランドの現実をありのままに描きたいと思っても、国家のイデオロギーがそれを許さなかったからです。間違っても台詞（セリフ）で現実を表現することなどできませんでした。検閲官が一番目を光らせて削除を要求してくるのも台詞の部分です。だから、会話のシーンでは実際には何も語ることができませんでした。観客にメッセージを伝えるためには台詞以外の別の手段を必要としました。私が国家的検閲の網の目をくぐり抜けた手法の一つは『映像の多義性』でした」こう述べて彼は代表作『灰とダイヤモンド』のラストシーンを引用して、ヨーロッパの文化的伝統としてのキリスト教との関連に言及しながら、映像のシンボリズムがポーランド映画の成功につながっていることを強調している点が大変興味深い。さらにワイダは自由な創作活動を疎外してきた社会主義時代のポーランドについて次のように述べている。「共産主義体制の崩壊という、これほど劇的な変化を生きているうちに体験できるとは予想だにしませんでした。軍隊に支えられた体制は、より強力な軍事力や政治力に押しつぶされない限り崩れることはないと思っていましたからね。結局、体制が自分で自分を食い尽くしたんです。誰も指一本触れていません。自然に崩壊したんです。マンモスのような巨大な生き物の最後と同じことが起きたんです。その途方もなく大きな体は、死ぬ瞬間まで立派に見えるけれど、内部は朽ち果て、頭と尻尾には何のコミュニケーションもない。共産主義はまさにそのようにして死んだんです。上層部と国民の間には何の接点もありませんでした。国全体がただ死を待つのみという状態でした。でも、まさかこれほどあっけなく崩壊するとはねー。共産主義というモンスターは、少しでも長く存続を図るために、戦車だろうと原子爆弾だろうと、使えるものはありったけ使うだろうと思っていました。意外にも完全に崩れさりました。共産党は、金をかすめ取るだけ取り、ため込みたいだけため込むと、途端に共産主義イデオロギーへの興味を失いました。

彼らは、うまい汁を吸える間だけ、ソビエトの共産主義革命という思想を受け入れていたにすぎないんです」

20世紀において、社会主義諸国における実験はことごとく失敗したと言えるが、その真っ只中にいたワイダの上記の発言は、現実味があり同時に視聴者を納得させる力を持っている。20世紀後半のドイツ社会文化を論ずるとき、隣国ポーランドでナチズムと共産主義を直接体験したワイダの映像活動は、たえず引用しまた再発見する価値を多く含んでいるのは確かである。

⇒関連映像資料：アンジェイ・ワイダの主な映画作品：

「世代」(1954)「地下水道」(1957)「灰とダイヤモンド」(1958)「ロトナ」(1959)「夜の終わりに」(1961)「白樺の林」(1970)「約束の土地」(1975)「大理石の男」(1977)「鉄の男」(1981)「ダントン」(1982)「愛の記録」(1986)「コルチャック先生」(1990)「鷲の指輪」(1992)「ナスターシャ」(1994)「聖週間」(1995)

**「聖週間」**〔1995年・ポーランド＝独＝仏〕

「聖週間」とは、復活祭前の春の一週間を指す。映画が描くのは、ナチスのユダヤ人絶滅計画に対してワルシャワのゲットーのユダヤ人が武装放棄した1943年4月19日から5日間。ナチスの手から逃れたユダヤ人女性を、かつての恋人である一人のポーランド人が、ワルシャワ郊外の自分のアパートにかくまう。だがそれはやがて他の住人の知るところとなり恐ろしい悲劇が起こる。当時のナチスは、ポーランド人に共同責任という概念を適用した。つまりユダヤ人をかくまった人だけが責任を負うのではなく、その人と同じアパートに住んでいる人々全員にも連帯責任を負わせた。そうした極限状態の中でポーランド人は当時国内に300万人いたというユダヤ人にどのように接したのか。黙ってかくまう者、事態の深刻さに狼狽する者や追い出そうとする者など。ポーランド人のとった様々な態度を、アパートという密閉した舞台を借りてワイダは同国人を冷静な目で

みつめようとする。◆ワイダは，新聞のインタビューで次のように語っている。「ナチス以降、世界中どこの国も人種差別という病気から少しも回復していない。残念なのは、今もそのことを認めざるを得ない状況にあるということだ。・・・この（ナチスに支配された：筆者）時代を描くことは今後もうないと思う。戦争について言うべきことはすべて言い尽くしたから。正直いって、今ではあの時代への関心が私の中からはげ落ちてしまった。かつての社会主義体制では、政治的なテーマは芸術作品でしか取り上げることができなかったが、民主化以降それは政治本来の場に戻ったということなのかもしれない」〔引用記事：『読売新聞』1996年11月27日〕

**⇒182.－187.関連映像資料**

**「ポーランドの～20世紀・ヨーロッパの証言（1）国家の再生（1900－1923年）（2）ユダヤ人（1923－1939年）（3）亡命政府と軍隊（1939－1945年）（4）人民の国へ（1945－1956年）（5）ゴムルカ体制（1956－1970年）（6）新しい時代（1970－1980年）」**〔1988年11月19・26／12月4・11・18・25日・ETV　製作：チャンネル4／英・各45分〕

かつてヨーロッパ最大の連邦国家の中心だったポーランドは、18世紀末までに隣国のロシアやプロイセン・ドイツに割譲され滅亡し、一度はヨーロッパの地図の上から消滅したが、20世紀に入り再び共和国として独立した。しかし、その後の道は苦悩に満ちたものだった。独ソ両大国による再分割、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺、そして第2次大戦後の政争など、ポーランドの歩んだ20世紀の苦闘の跡を描いたドキュメンタリー。ポーランドは、第1次世界大戦後に再び独立を果たすが、人口の3分の1はいくつかの少数民族であった。第一回目では第一次世界大戦後までの出来事をフィルム映像と当時を生きた人たちの証言で綴っていく。第2回目は、ポーランドのユダヤ人問題に焦点を合わせる。

188.「作家ギュンター・グラス～ドイツ「11月の国」からのメッセージ～」〔1996年11月9日『未来潮流』・ETV・75分〕

1989年11月9日、誰も予想しなかった「ベルリンの壁（Berliner Mauer）」が崩壊した。そして翌年のドイツ統一後、1992年11月にネオ・ナチによりトルコ人住宅が放火され3人が焼死するという痛ましい事件が起きた。時間をさらに逆上って1918年11月には、第1次世界大戦の敗北の後に社会民主主義革命が起きてドイツ帝国は崩壊し、その5年後の1923年11月に、ヒトラーはミュンヘンで暴動を起こす。このように11月という月はドイツ近・現代史において重要な出来事の積み重なった月でもある。ドイツの作家ギュンター・グラス（Günther Grass）は、1993年に「11月の国～13のソネット～（„Novemberland 13 Sonette“）」と題する詩集を発表した。トルコ人住宅放火事件に触発されてのことである。そこには統一後のドイツに対するグラスの思いが書き綴られている。グラスは、ドイツを11月の国と呼んでいる。グラスは、1959年「ブリキの太鼓」によって一躍戦後ドイツ文学の旗手となり、その次々と話題作を発表し、1996年には69歳でリューベック市が主催する『トーマス・マン賞』を受賞した。だが、文学者であると同時に現代美術の作家の顔を持つことは意外に知られていない。番組では、ドイツ文学者の池内紀氏が彼のアトリエを訪ね、激動する現代ドイツの中で屹立する彼のメッセージを聞く。まず池内氏は話題を呼んだグラスと大江健三郎氏との往復書簡を交換することになった動機について語る。「戦後50年の時点で、過去の歴史から私たちははたして何を学んだのかということを考えてみようということだった。ドイツと日本との間には、違いもあるが同時に共通する部分もたくさんある。両方とも戦争中はある種の犯罪を侵しているわけであるが、大江さんと私、作家である私たちは、常にそのことを思い起こさせるようにするという役割があると考えたのです」。続く池内氏との対談の核心は、「ア

ウシュヴィッツの後で、詩を書くことは野蛮である。」という哲学者アドルノの命題をめぐるものとなる。番組の最後では、グラスの自作朗読が数分間収録されている。彼は祖国ドイツに複雑な思いを込めて次の一節を朗読する。貴重な映像である。

「不安が徘徊し、十一月は居続けようとする。
二度と戻らない長い日々の晴朗。
最後の蝿たちが　窓ガラスから落ち、そして停滞が　時間の立食の後に続く。

・・・

ネクタイを締め髪を分けたスキンヘッドたちは勲章をもらう
この経済の将来の市場を褒める人、彼を時代精神は徹底して刺激した。
彼に対し、三分の二の多数が不動の姿勢を取る、
不安から一つになって。十一月の雨に泣くひとりの道化」

⇒関連映像資料

**189.「ブリキの太鼓（, Die Blechtrommel'）」**〔1979年・西ドイツ＝仏、制作・脚本：フランツ・ザイツ、監督・脚本：フォルカー・シュレンドルフ、原作：ギュンター・グラス〕

かつてはドイツ領の町ダンツィヒ（現在はポーランドのグダニスク）を舞台に、1927年から45年間の暗い時代を少年オスカルの目を通して描く。3歳の誕生日を迎えたオスカルは大人になることを拒絶するため自ら地下の倉庫へ転落。その日から彼の成長は止まり、同時に奇声を発するとガラスが割れるという超能力を身につける。オスカルの母は，夫アルフレートの目を盗んで従兄弟と濃密な情事を重ね、快楽におぼれるが、やがて人妻としての良心の呵責に耐えかね、さらに成長しないオスカーへの絶望も手伝って自殺してしまう。そのころドイツではヒトラーが政権を握り、ダンツィヒの町でもユダヤ人狩りが始まろうとしていた。奇声を発しながらブリキの

太鼓を叩きつづける自ら成長を止めたオスカルは、ナチス政権下のポーランドの歴史の寓意でもある。監督のシュレンドルフは、原作者グラスの意図する二重構造の世界を的確に捉えている。超能力やサーカスの小人たちなど非日常的要素を加えながらポーランドの暗い時代をストレートに表現した映像が強烈な印象を残す。アカデミー外国語映画賞／カンヌ映画祭グランプリ受賞。＜142分＞（参考資料：ぴあシネマクラブ外国映画編1999－2000年、1999年）

**190.「抽象の美・愛のかたち～カンディンスキー／ミュンター～」**

〔1996年11月24日『日曜美術館』・ETV・45分〕

20世紀抽象絵画の父と言われるヴァシリー・カンディンスキー（1866－1944）は、20世紀初頭から新しい絵画表現を次々と生み出していった。彼の作品を最も多く収蔵しているのは、バイエルン州の州都ミュンヒェンにある「レンバッハ・ミュンヒェン美術館」である。ここには、彼が抽象絵画表現にたどりつく過程を示すおよそ600点余りの作品が収蔵されている。これらの作品群は、1957年に一人のドイツ人女性によって寄贈されたものである。それが、ベルリン生まれの女流画家ガブリエーレ・ミュンター（1877－1962）である。二人の間に生まれた愛情と芸術に対する情熱が抽象絵画という新しい表現を生み出していった。番組では、放映時に宮城県美術館で開催されている『カンディンスキー展』を、番組案内役の桜井洋子（NHKアナウンサー）が訪ね、展示中の作品を手がかりに抽象絵画が表現するもの。そしてその成立の経緯を、二人の出会いを中心にして歴史的に俯瞰しようというものである。レンバッハ美術館のあるミュンヒェンは、パリと並んで19世紀末から20世紀初頭にかけて芸術の都として、ロシアや東欧から多くの芸術家が集まった都市である。カンディンスキーは、裕福なロシア人貿易商の家に生まれ、モスクワ大学で法律、経済学を学び、学者として将来を約束されていた。30歳の時にある展覧会で出会ったフランス印象派の画

家モネの絵に衝撃を受け、絵を学ぶために妻を伴ってミュンヒェンに移り住む。やがてこの地で画学生ガブリエーレ・ミュンターを出会い、二人の不倫の恋が始まる。1914年、第１次世界大戦の勃発とともに、ロシア人であるカンディンスキーは国外退去を余儀なくされ、やがてミュンターとの別離生活は二人の関係をも疎遠にしていく。数年後彼女のもとに、カンディンスキーがロシアで結婚したという手紙が届けられた。1933年ヒトラーが政権を握ると抽象絵画のような前衛芸術は、ナチスの理念に反する『頽廃芸術』とみなされ排斥の対象となる。ミュンターは、表面上はナチスに協力する姿勢をとりながら、密かにカンディンスキーの膨大な作品を別荘の地下に隠した。

◆カンディンスキーは、大戦の最中の1944年に滞在していたパリで亡くなった。それから13年後、80歳の誕生日を迎えたミュンターは、隠しつづけていたカンディンスキーの絵をレンバッハ美術館に寄贈した。こうして我々が今日見ることの出来る作品の大半は、ミュンターの「愛の記憶」でもある。もちろん、自分を捨てた男の残した作品群を絶えず自分の手近で大事に隠し続けることには、生身の女性として相当の覚悟が必要だったはずである。それを単なる「過去の男を思いつづける女の未練」とみるか、あるいは「偉大な芸術作品の守護者」とみるか、それは番組を見る視聴者が自ら判断しなければならない。

**191.「行政改革への提言～日独比較・予算編成から～」**〔1996年12月29日『BS フォーラム』・BS１・50分〕

1995年11月に発足した第二次橋本内閣は、財政改革から省庁再編、金融の規制緩和にわたる行政改革の実現を最優先課題とした。橋本首相は言った。「行政改革につきましては、いろいろな抵抗や困難が予想されますが、私は身を燃焼させ尽くしてもやり抜きます」首相は、行政改革会議を発足させ、自ら会長になり行革の推進にやる

気は示した。巨額の財政赤字を抱え、官僚への批判が高まる中、行革の実施は緊急であったが、言葉とは裏腹に問題は先送りにされたに過ぎなかった。11月の初旬ドイツのボンで日独の有識者を集めて「行革」を巡るフォーラムが開催された。会場は、ボンにある早稲田大学ヨーロッパ・センターである。東西ドイツの統一（1990）以来増大している赤字のために、財政改革が緊急課題のドイツと、現在先進国中最大の財政赤字を抱える日本は、ある意味では類似した政治状況にあると言える。日独両国では戦後50年間にわたり様々な行革が模索されてきた。しかし、その成果は十分とは言えない。2日間にわたるこのフォーラムにおいては、まず「予算編成」を含む4つの分野において、日独両国の試みてきた行革の歩みと現状、そして問題点が報告された。武藤博巳（法政大学）は、政治家の官僚に対するイニシアチヴのあり方が問われている日本の予算編成の問題点を報告した。「第2次世界大戦後、憲法も国家機構も改変されました。しかし日本の内閣制度は、同じような問題点を放置してきたのです。日本の官僚制度は未だに旧態依然たるものがあります」風間規男（近畿大学）は、日本の情報化政策を紹介。現在導入が進む省庁間のコンピューター・ネットワークが行革にはつながらないとの懸念を示した。「日本の官僚たちは、今情報技術を使って政治的支配に乗り出そうとしています。霞が関ワイドエリアネットワークは、検討段階から政治家の手を離れて、官僚たちの思いのままに進められています」また、ベルリン工科大学のクリストフ・ライヒャルト氏は、行政人事改革には民営化を取り入れる以外に方法はないと指摘した。「ドイツの行政人事は改革を余儀なくされている。つまり行革が失敗すれば、ドイツは機能しなくなってしまうのです。行政サービスによって生きる人々の生活も破壊されます。ドイツの官僚機構に残された道は改革のみです」ポツダム大学のベルナール・ヤン氏は、ベルリンとボンの首都機能の分割問題を中心に、ドイ

ツの組織改革の現状と問題点を報告した。「ベルリンとボンに政治機構を分割するという案は問題を抱えています。中でもボンとベルリンに各省庁の機能を分割して設置すると、省庁間そして省庁内でのコミュニケーションを円滑に保つことはできません」　番組では、以上要約した基調報告に続いて、政治と行政がせめぎあう場としての「予算編成プロセス」に関して、日独の類似点・相違点そしてお互いが抱えている問題点について議論が行われている。

## 1997年（平成９年）

**192.「ベルリン・すべては壁から始まった」**〔1998年１月４日『世界わが心の旅』　旅人：坂田明（ミュージシャン）・BS２・45分〕

21年前、サックス奏者坂田明は山下洋輔トリオの一員として東ドイツに招待された。そして東ベルリン在住のミュージシャンとロストックでセッションをした時の忘れえぬ友人たちを再び訪ねる旅に出る。再会を果たした東ベルリンのミュージシャンの一人はこう言う。「私たちにとって壁は２つの意味があった。一つは私たちを閉じたこと、もう一つは壁に反抗する力を与えてくれた。社会的政治的に反発するバネとしての壁は、ある意味では創造へのバネともなった。昔は東側のシステムに反対していたが、現在は今のシステムに反対している。今のほうがはるかに狡賢な社会である」坂田は、壁の崩壊で商業主義や資本主義という新しい壁ができたという彼らの認識に意表を突かれる思いであった。サックス奏者でトリオのリーダーであったマンフレート・シュルツ（62歳）は、現在体の自由のきかない難病に罹っていた。見舞いに訪れた坂田は、サックスで「五木の子守歌」を吹いて聞かせる。

**193.「ベルリン～道具の国で名人に出会う旅～」**〔1997年１月12日『メトロポリタン・ジャーニー』・BSN＜TBS系列＞・55分〕

ドイツで生み出されるさまざまな商品を底辺でしっかりと支えてい

る歴史的文化的ソフトウェアとしての「マイスター制度」が、いかに現代社会に根付いているかについて、河合美智子と鴻上尚史の二人がベルリンの町を手がかりに訪ね歩く。二人はベルリン・テーゲル空港に降り立ち、いたるところ工事用クレーンが林立するベルリン市内に入っていく。2人が訪ねるマイスターは、（1）健康靴のマイスター（2）モダンなデザインが売り物の女性靴職人（3）醸造マイスター。ビール・カンパニーと呼ばれるこの醸造所では、最近になり麻薬成分を取り除いて味と香りを抽出した『大麻ビール』が人気を集めている。（4）かばんなどの革製品を中心とした修理・再生専門のマイスター。番組の第二部では、田村英里子が「ベルリン・ロマンと幻想を求める旅」というテーマで、ベルリン、ポツダム、マイセンと旅する。内容はドイツ紹介番組のほぼ定番といえるものでそれほど新鮮味はない。バラエティー番組ではあるが、番組の前半の「マイスター制度」に関する部分では、ドイツの最新情報をうまく伝えている点は評価してよい。

**194.—199.「ヒトラーと6人の側近たち」**〔監修：芝健介（東京女子大）制作：ZDF／1996年・45分×6回〕

**（1）ヨーゼフ・ゲッベルス**〔1997年1月17日・ETV〕　番組は、ゲッベルスの家族のホーム・ムービーの映像から始まる。そこでは、彼は典型的なアーリア人家族の中でよい父親の役を演じているのがうかがえる。ヒトラーの神話に溺れて破滅した男、それがヨーゼフ・ゲッベルスであった。青年時代のゲッベルスは、キレ者の国家主義者で文筆家であった。ただし、その才能を買う人物はなかなか現れなかった。ヒトラーと出会うまでは。後日彼の日記には次のように記されている。「1925年11月6日、ヒトラーのあの星のような青い目が訪ねてきた私を喜んで迎えた。私は天にも昇る心地だった。彼の手が私の手を握る。ウィットや皮肉やユーモア、そして真剣さを込めてヒトラーは喋りつづけた。この人こそ、私にふさわしい生

まれながらの指導者、未来の独裁者なのだ。」彼の人生は、この時決定された。1933年３月、ナチス政権の閣僚入りを果たした彼は「国民啓蒙宣伝省」の大臣となる。国民を煽り立て、洗脳するための大キャンペーンは、ここから発信されていった。彼は語っている。「思想宣伝には秘訣がある。何より宣伝の対象人物には、それが宣伝だと気づかれてはならない。同様に、宣伝の意図も巧妙に隠しておく必要がある。相手の知らない間にたっぷり思想を染み込ませるのだ」ゲッベルスの巧妙な宣伝により、ドイツ国民は次第に統制されている現実に麻痺していった。番組では、記録映像とナレーション、そして13名の関連した生存者の証言によって、ゲッベルスの様々な側面が浮き彫りにされていく。

⇒関連映像資料：

**110.「メディアと権力・大衆操作の天才・ゲッベルス」**〔1994年３月30日〕『法政理論』（2000年）において紹介。

⇒関連文献資料：「ゲッベルス～メディア時代の政治宣伝～」平井正、中公新書　1991年。

**（２）ヘルマン・ゲーリング**〔1997年１月24日・ETV〕「ヘルマン・ゲーリングは、ナチス第三帝国においてヒトラーに次ぐNo.2であった。大言壮語を操り、地位を利用して私腹を肥やした男。派手な衣装を着こなし、彼はナチスの権力者を演じた。国会議長、ドイツ空軍総司令官、国家元帥－華々しい経歴に飾られた彼の人生は、しかし最後は戦争裁判の被告として幕切れを迎える」（番組冒頭のナレーションより引用）

⇒関連文献資料：「はがき通信～『朝日新聞』1997年２月４日より〕未来に生かす検証海外ドキュメンタリー「ヒトラーと６人の側近たち」を見た。50年以上たち、日本では昔の話になっている第２次世界大戦。当時の指導者を映像、文書、談話などを通してきちんと検証している。過去の事実をしっかり検証してこそ未来に生かされる

と思う。振り返って日本はどうであろう。（埼玉・男性60歳）

（3）ルドルフ・ヘス〔1997年1月31日・ETV〕

「1941年5月10日、およそ500機のドイツ軍の爆撃機がロンドンに襲いかかった。すでにその半年前イギリスを空から叩くのに失敗したドイツは、一矢を報いるために大編隊を送り込んだのである。同じ日、別の一機がやはりドイツからイギリスを目指した。操縦するのはナチス総統代理ルドルフ・ヘス。だが彼は知らなかった。その日から永遠に囚われの身になることも。そして何十年も後に、ネオナチスが彼を伝説の人にしてしまうことも」（番組冒頭のナレーションより引用）ヘスの子息にあたるW·R・ヘス氏は番組の中で次のように述べている。「父は生前言っていました。ネオナチがやっていることを自分は決して支持しない。あれはドイツに害をなすだけの誤った行為なのだと。ですから父はネオナチに英雄扱いされて喜ぶどころか、彼らを愚か者呼ばわりしていたのです。」これに対して、ベルリンの北東部に位置するシュパンダウ刑務所所長のT・ルティシェ氏はもう少し手厳しい評価をしている。「ヘスは、自分の過去やナチスのやったことに対して全く反省も後悔もしていませんでした。彼のかたくなな態度は息を引き取るまで変わることなく、ただ自分を正当化していたんです。ですから、私にとっては彼は好感の持てる人物ではありませんでした。」ヒトラーの側近の中で、ヘスほど毀誉褒貶した人物も稀である。しかしながら、番組においてかなり克明に紹介されるヘスの生い立ちや青春時代には興味深いものがあり、複雑な側面を持ったこの人物の実像に迫るさまざまな手がかりが提供される。ヘスは1894年、エジプトのアレキサンドリアに生まれた。愛国心の強い父は貿易商として成功を収め、富裕な家庭に育つが、ミュンヘン大学に通っていた頃、ハウスホーファー教授の「地政学と生存権構想」に強く影響を受け、やがてナチス16番目の党員となり、1923年11月のミュンヒェン一揆に参加。この暴

動は失敗し、ランツベルクの刑務所でヘスは、ヒトラーの「我が闘争」の口述筆記を担当。以後次第にヒトラーに傾倒していく。

**(4)ハインリッヒ・ヒムラー**〔1997年2月7日・ETV〕

「ナチス親衛隊（SS)」－かつてヒトラーの護衛隊にすぎなかった小さな組織は、ハインリヒ・ヒムラーの手によって巨大な権力機構へと変貌した。ドイツ国民を死の戦いに駆り立てた男。抹殺すべき人々を選び、殺人部隊を動かした男。一見弱腰でおとなしいこの男こそ、総統が信頼を置いた死刑執行人であった」（番組冒頭のナレーションより引用）南ドイツ・バイエルン地方－ハインリヒ・ヒムラーの生まれ育った環境は、道徳と秩序そして教養に満ちていた。彼の生い立ちから後の残虐な思想を説明するいかなる手がかりも見出し得ない。彼は、1900年ドイツの中流家庭に生まれた。両親は穏健なカトリック信者で礼節を重んじた。少年期、彼は多くの学者や政治家を輩出した名門校で学ぶ。両親は息子に良い教育を与えることに努力を惜しまなかった。特に教員であった父は、人間形成における教育の力を最も重視した。学校でのヒムラーは、歴史が好きなあまり目立たない少年であった。知的で愛情に満ちた家庭。少年の心をねじ曲げるような体験はどこにも存在しない。それでも人は自分自身の心をねじ曲げ、犯罪に突き進むことが出来る。ヒムラーの人生は、その恐るべき見本となっている。ヒムラーはドイツ降伏後も逃走を続けたが、1945年5月23日連合軍に逮捕された彼は、歯に仕込んであった毒を飲み、自ら命を絶った。

**(5)カール・デーニッツ**〔1997年2月14日・ETV〕

第二次世界大戦中のドイツ軍が誇った潜水艦Uボートは、その神出鬼没の行動と強烈な破壊力によって世界にその名をはせた。しかし、乗組員の4分の3は帰らぬ人となった。すなわち3万9000人のうち、2万8000人が戦死した。一方連合国の海の犠牲者は3万人と、敵味方あわせて膨大な生命が奪われた。ドイツ海軍の指揮は一人の

有能な司令官に任されていた。ヒトラー総統の信頼を勝ちえ、なおかつその後継者の地位にたどりついた男、それがカール・デーニッツであった。1891年に生まれた彼は、後にフレンスブルク海軍兵学校に入り、第一次世界大戦ではUボートの艦長となる。第二次世界大戦末期、敗色が濃厚となった状況の中でヒトラーは自殺し、その後継者となったデーニッツが真っ先に取り組んだことは、連合軍の捕虜になるドイツ軍兵士を減らすことだった。デーニッツは彼の後継となった海軍総司令官に可能な限りの時間稼ぎを命じる。そしてドイツ軍は西部戦線でまず部分的な降伏を行い、残された輸送戦力を占領地域から撤退するドイツ人の支援にあてた。計画はうまく運びバルト海沿岸部など、戦局が悪化した地域から200万人以上のドイツ人が逃げ延びることができた。1945年5月7日、デーニッツは連合軍に無条件降伏を受諾、ヒトラーの自殺後わずか2週間の政権であった。戦後は戦犯として捕らえられニュルンベルク裁判で「禁固十年」の判決を受ける。釈放された1956年、デーニッツは「私は何も語らない」（Ich werde schweigen.）と宣言した。Uボート乗組員3万9000人のうち、2万8000人の兵士は、語りたくても何も語ることのできない時代の証人として今も大西洋の水底（みなそこ）に今も静かに眠り続けている。

（6）アルベルト・シュペーア〔1997年2月21日・ETV〕

ヒトラーの第三帝国は、独裁者の威信を飾り立てる壮大な建築物を必要とした。その時一人の若者がドイツの建築界に彗星のように現れる。アルベルト・シュペーア（1905－1981）は、二十代にしてヒトラーの建築プロジェクトを任される。シュペーアの才能は建築にとどまらず、後には軍需相として目を見張るほどの辣腕を振るった。ヒトラーはシュペーアに最後まで特別な信頼を寄せた。独裁者が唯一心から打ち解けることができたのは、この16歳も年下の側近であったといわれる。シュペーアの父親はマンハイムの裕福な建築家で

あったが、シュペーアは1930年代当時ナチスの牙城ともなっていたベルリン工科大学に学ぶ。1930年12月シュペーアはある講演会でヒトラーの演説を聞き深く感銘を受ける。ヒトラーは演説で語る。「人はパンのみで生きるのではない。ドイツ民族が再び興隆するためには、ドイツ文化とりわけ芸術を再生させねばならない」３ヶ月後シュペーアはナチス党員となる。彼はSA（突撃隊）のような暴力によってではなく、あくまで知的な形で運動にかかわろうとする。やがて、ナチス側近の建築家で当時の建築界の重鎮の死に伴い、1934年１月わずか28歳で大抜擢され、以後シュペーアはナチスの「劇場型の大衆扇動政治」のショーアップに貢献していくことになる。若き日に画家にあこがれ、そしてなり損ねたヒトラーが建築マニアであったことはよく知られている。彼にとって建築とは「力と秩序のシンボル」を具現するものであり、その目標の一つが「ゲルマニア」と称される壮大なベルリン都市改造計画であった。軍需大臣任命後は、合理的な管理組織改革を断行し、軍需品の生産性を向上させた。ドイツの敗色が濃厚になると、ヒトラーはドイツ全土に「焦土作戦」を下すが、シュペーアは必死に反対し、辛くもドイツの焦土化を阻止することに成功する。ニュルンベルク裁判では「禁固二十年」を宣告されるが、出所後の晩年は不遇なものであった。そして家族や友人に見放され1981年にロンドンで客死する。

⇒参考文献：「ヒトラーの建築家」東　秀紀著、NHK出版　2000年。

**200.「ヨーロッパ冬物語・舌を出せ　愚者たちの祭典～ドイツ・ウルム市～」**〔1997年２月27日・BS２・ナレーション：麿赤児・50分〕

ドイツ南部ドナウ河畔に開けたウルム（Ulm）の町は、今も中世の面影をとどめている。かつて中世の時代にはウルムの貨幣が世界を支配するとまで言われたこの町は、ドナウ河を利用した貿易ルートの起点として繁栄を極めた。今は人口11万人の静かな地方都市である。ウルムのシンボルでもある大聖堂は、高さ161メートルで世界

で最も高い尖塔を持つ。14世紀に工事が始まり19世紀の終わりにようやく完成した。その完成の前夜、20世紀に最も影響を与えることになる一人の天才がこの町に生まれた。1879年にアインシュタインは、ウルムに誕生した。教会のステンドグラスには、彼が考えだした$E=mc^2$という相対性理論の数式が浮かび上がっている。番組の中で紹介されるアインシュタインにまつわるいくつかのエピソードは、天才と愚者という一見した二項対立の中で、両者の逆転性を暗示した効果的なスパイスとなっている。1月下旬、真冬の3日間この町で不思議な祭りが行われる。「舌を出せ（, Zunge, raus!'）」と人々が口々に叫ぶこの祭りは、ヨーロッパ各地で行われるカーニバルの原型ととどめているとい言われる「愚者たちの祭り」である。番組では、「愚者が舌を出す」という言葉にどの様な意味が込められているか、社会文化史的に読み解いていく。ヨーロッパの中世、次第にキリスト教が浸透する中で、森は相変わらず魔物が闊歩する未知の世界であった。しかし、農民たちにとって森はゲルマンの異教の時代から続く、様々な豊穣の神々（多神教）のすみかでもあった。キリスト教化されてもなお農民たちは、そうした魔物や精霊の存在を信じ、それらと隣り合わせに暮らしてきた。冬の化身とも言える魔物たちが姿を表すとき、それは春の到来を予感させるときでもある。そして愚者祭りの主人公である、魔物や魔女は、キリスト教の信仰を基盤とした秩序ある社会の中で、抑圧される人間の情念の象徴ともなる。愚者は仮面をかぶった道化として既成の社会的宗教的権力を痛烈な皮肉を込めて笑い飛ばすという庶民の知恵の現れでもある。祭りの3日間、人々は日常のうさ晴らしをした後、再び善良で権力に従順な、そして一見して退屈とも言える平凡な日常へと立ち戻っていく。祭りが終わると、キリスト教の祭りである復活祭の季節となり、やがて北国ドイツにも春が到来する。

**201.「消えた潜水艦イ52号」**〔1997年3月8日・NHK・50分〕

旧日本軍のイ52号潜水艦は、1944年３月広島県呉市の港を出発し、ドイツ占領下のフランスの潜水艦基地ロリアンへ向かう途中、アメリカの雷撃機に撃沈された。この艦には、時価25億円相当の金塊２トンが積載されて、さらに当時の日本でトップクラスの民間技術者たちが同乗していた。ドイツの新兵器の情報の入手や技術導入が彼らの任務で、金塊はその代償としてナチスが要求したものである。目的地のロリアンまで、制海権のないインド洋・大西洋を通過し、３万キロの深海を行く過酷な任務であった。イ52号潜水艦には、艦長以下軍人118名、ドイツ語通訳１名そして民間の技術者７名が乗っていた。同盟国ドイツへ向かった潜水艦作戦は、戦時中５回に渡って実施された。1942年にドイツにたどり着いたイ30号に関しては、ドイツ側の記録フィルムが残されている。その後派遣されたイ34号・イ29号は撃沈、イ８号は往復６万キロの旅の後に1943年11月21日、日本に帰還した。イ52号が、かろうじてアフリカの希望峰を抜け、一路大西洋を北上中の1994年６月６日、連合軍はドイツ占領下のフランスに総攻撃をかけた。ロリアンの北方250キロメートルのノルマンディーの海岸に、28万人の兵士が上陸した。やがてドイツ軍の潜水艦基地ロリアンは全く孤立することになる。一方、イ52号の行動はすべて米軍に知られていた。日独間の暗号通信はすべて解読されていたのである。いわば、出港の当初からイ52号は沈むべき運命を背負ったとも言える。日米において「情報戦」の勝負はすでについていた。番組は、イ52号に乗り込んだ７名の技術者の一人、蒲生郷信（さとのぶ）さんと、その遺族の思いを中心に取材し、さらに撃沈の瞬間を録音したアメリカ側のテープなどの新資料を交えながら、イ52号潜水艦の運命を掘り下げている。番組のナレーションは次のように締めくくられている。「欧米との技術格差を埋めるため126人はドイツへ向かった。日本の技術の実態を知る７人の技術者にとってはすでに遅すぎた任務であった。ドイツ側のU530号から

受け取った「電子装置」も間に合わず、アメリカの最新兵器に捕らえられた。126人は今も大西洋の5000メートルの深海に眠り続けている。日本から1万4000キロ、遺族たちが肉親とともに海底に消えた潜水艦の行方を知るまでには半世紀が過ぎた。ドイツに向かう深海の隠密潜水艦作戦は、イ52号の撃沈を最後に打ち切られた。2トンの金塊を求めるアメリカの冒険家たちの行動が、謎の潜水艦の足取りに光を当てた。金塊の引き上げ作業は、最終段階に入っている。」

⇒関連映像資料：

**「消えた潜水艦イ52号と極秘和平工作」**〔2000年5月28日・『知ってるつもり？！』・TeNY・55分〕　1998年、海底で発見された潜水艦イ52号。この旧日本海軍の最新鋭艦は1944年フランスのロリアン港に向け出向した。番組は、そのロリアン港でイ52号の到着を待っていた海軍中佐・藤村義朗の人生に迫る。詳細は、後日掲載の予定。

⇒関連映像資料：

**88.「ザ・ラスト・Uボート」**〔1993年1月2日・NHK〕「ドイツ社会文化論としてのビデオアーカイブズ（1）」『法政理論』第33巻第3号　p117,2001年を参照のこと。

**202.「21世紀への奔流・エピローグ『国境なき』国家の時代へ」**〔1997年3月14日・NHK・60分〕

番組ではこれからの世界で国家が最低限度担う役割について、①多様な考え方を受け入れていく寛容さと、②国民の拠り所となるその国の歴史を踏まえた一つの道筋を示すという2点を設定し、この一見相反する2つの役割をどう実現していくかという課題をドイツとオランダを事例に紹介しながら考察していく。国家の求心力となってきたその国の歴史－ドイツは、21世紀に向けてその自らの歴史と格闘している。ベルリンの壁崩壊後、ドイツで暮らしたことのない

ドイツ人が豊かさを求めて、今ぞくぞくと祖国に帰ってきている。多くは18世紀以降、ロシアやウクライナに移住したドイツ人の子孫である。その数は旧ソビエト連邦で200万人に上ると言われている。ドイツ政府は、毎年20万人以上を移住者の施設に収容している。これらの人々は、旧ソビエト時代に強制的にシベリアに移住させられ公の場でドイツ語を使うことも禁止されていた。ドイツを離れても、その歴史と文化を背負い、「血統」だけを拠り所に祖国に帰ってきた人たちである。政府は、そうした「血統書付きの難民」を他の難民よりも優先して受け入れている。ドイツ人とは何か－ナチス時代のユダヤ人迫害の反省から民族意識そのものを抑えてきたドイツ人に、再び国家のよりどころを問いかけている。戦後ドイツは外国人労働者を一時期積極的に受入れ、群を抜く「経済成長」を国家的求心力としてきた。しかし、ドイツ統一後（1990）旧西ドイツと旧東ドイツの経済力の格差が露呈し、東の人たちは高い失業率に苦しんでいる。そのことが外国人よりもドイツ人を優先するべきだという意識を呼び起こし、一部でネオ・ナチスなどの過激な動きに発展している。この動きが周囲の国の人々や、国内の外国人にドイツの民族意識への警戒心を抱かせることになるかもしれない。21世紀へ歩もうとするとき、ドイツは加害者としての歴史に絶えず突き当たることになる。もちろん、国内における歴史教育の視点は一貫して戦争の反省・否定的姿勢を貫いてきたし、ドイツの国家元首である大統領は、事あるごとにナチス時代への反省を国民に訴えてきた。こうしてドイツは国の内外の異なる民族の人たちと、歴史への認識を一致させる作業を繰り返し、それを新たな世紀への国家の土台にしようとしている。

◆番組では、さらに1997年１月の「ドイツ・チェコの和解宣言調印」にいたる経緯が紹介され、ドイツと隣国のチェコにおいてそれぞれが加害者・被害者となった歴史にどう決着をつけるかという取組が

紹介される。1938年ナチス・ドイツはドイツ人が多く住むチェコのズデーテン地方を併合し、チェコ人を迫害した。しかし敗戦後およそ300万人のドイツ人がズデーテンから「追放」され、多くのドイツ人が寒さや飢えで命を落とした。和解宣言の調印は、互いの民族の歴史に共通の認識を持つことから始めようという両国の決意の表れで、宣言の中でお互いが引き起こした不幸な事実と責任を認め合った。その上で宣言はこう記している。「ともに未来への道を歩むためには、過去についての明確な言葉が求められ、一連のできごとにおける原因と結果を誤って判断してはならない」国家の求心力をどこに求めていくのか－民族の歴史に世界と共通の認識を持たなければ、新しい世紀の国家像を築けないことを、現在のドイツは自覚している。もちろん、番組のテーマはそのまま日本に投げ返されることであり、歴史教科書問題を引きずる我々を絶えず憂鬱な気分にさせる重いテーマでもあり続ける。

**203.「子供たちは忘れない～残されたホロコーストの手記～」**〔1997年5月2日・BS1、制作：マーク・ゴードン・カンパニー／CBS／米・1995年、案内役は映画俳優のキアヌ・リーブス・50分〕

ナチスによって殺された600万人のユダヤ人のうち150万人は18歳以下の青少年と言われる。番組では、ホロコーストの犠牲者となった青少年たち手記や、残された写真や映像をもとに、平和な日常生活が戦争暴力によって少しずつ破壊されていく過程が丹念に語られていく。「なぜ自分たちは迫害されるのか」－ユダヤ人の子供たちの視点から、ナチスの人種迫害政策の非人間性が静かなテンポで検証されていく。

◆本稿執筆時点で、ようやくアフガニスタンという国の再建会議が日本を座長として東京で開催される段階にまでこぎ着けた。2001年9月11日の同時多発テロ以来、日本のメディアは膨大な時間を費やして、テロとそれに対する米軍の報復攻撃の状況を報道してきたが、

歴史が子供の視点で語られることは少なく、しかも戦争の最大の犠牲者が子供であるときに、この番組は煽情的なメディアの戦争報道の行間を読み解く冷静な視点を思い起こさせる恰好の手がかりを与えてくれるように思われる。

**204.「ゲーテ街道・恋多き天才が旅した道（前・後編）」**〔1997年5月11／18日『道浪漫』BSN＜TBS系列＞　各55分〕

作曲家小椋桂（おぐらけい）が、旧東西ドイツを文字通り東西に結ぶ400kmの「ゲーテ街道」を旅する紀行番組。フランクフルトは、ドイツ経済の首都とも呼ばれるドイツ第二の都市、ここで1749年にゲーテが誕生する。彼が生まれ育った家は、現在も「ゲーテハウス」として旧市街の一角に保存されている。小椋は、フランクフルトを起点に、フルダ、アイゼナッハ、エアフルト、ワイマール、イエーナそして街道の執着点ライプチッヒに至る街道を旅しながら、ゲーテの文学創作のエネルギーともなった数人の女性との交流のエピソードを紹介していく。

**205.「市民の20世紀（9）ホロコースト」**〔1997年6月8日・NHK 50分、制作：BBC/WGBH／英・米 "People's Century　⑨Masters Race"〕

1933年1月ベルリン、国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）、通称ナチスの指導者アドルフ・ヒトラーがドイツの首相に任命された。ドイツ国民はやがて独裁政権に基づく一連の思想を信奉することを求められることになる。番組では、ナチスの政治的行為の中でも際立つユダヤ人に対する人種差別政策いわゆる「アンチ・セミティズム」の成立過程とその実行過程を数多くの関係者の証言を織り交ぜながら丹念に追っていく。番組の中では次のように語られている。「ナチスは自分たちの思想を支える歴史的神話を作り上げた。その神話はこう主張する。純潔なドイツ人は生まれながらに優越民族である。なぜなら彼らはアーリア人の血を引く中世の騎士の子孫

であるからだ。ドイツ国民は自分たちの先祖は優秀で文化的な民族であったと教え込まれた。」これは日本の戦前にも見られた「皇民教育」とよく似た独りよがりの思想であって、教育制度が政治に巧妙に利用された例でもある。ナチスに協力的であった考古学者は、偽の遺跡を発掘することまで行った。過去の歴史を意図的に演出するための「遺跡捏造事件」は2000年日本でも大きな話題となった。ユダヤ人へ差別政策は、教育現場で次第に強化されていく。映像を駆使した巧妙なプロパガンダ映画も思想宣伝に利用された。ドイツ国内に住む約50万人のユダヤ人のうち、伝統的な生活スタイルをとる人の割合はごくわずかで、大多数はドイツ人社会に溶け込んだ生活を送っていたのであるが、30年代後半になるとドイツのいたるところに「ユダヤ人立ち入り禁止（Juden sind unerwünscht)」という標識が掲げられた。それはゆっくりであるが着実な日常生活の変化であり、巧みに国民は巧みに洗脳されていく。ユダヤ人以外に、ナチスの「優生思想」にそぐわないそれ以外の少数者は、定住しないロマ（ニ）～かつてはジプシーと称されたが、現在は差別表現として用いられていない～、精神障害者、黒人、同性愛者などもナチスのイデオロギーの犠牲となった人々である。社会的経済負担の軽減のために、生きるに値しないと判断された人々には「安楽死（Gnadentod)」が施された。なかでもよく知られているのが、ハダマール精神病院の地下室で精神障害者が約一万人近く一酸化炭素ガスで殺されたという事例である。

一般にナチスの蛮行としてユダヤ人の虐殺がたえず連想されるわけであるが、この番組でも扱われているように、人種差別は、たえず集団相互の優越の序列という思想、および同一集団内における特定のマイノリティの排除原理と連動している。ナチス当時、ドイツ国内に住んでいたユダヤ人はおよそ50万といわれているが、虐殺で600万人が犠牲になったとすれば550万人はどこから連れてこられた

のか。もちろんそれはたナチスの占領したほかのキリスト教諸国、たとえばフランスやポーランド、ソ連などから移送された人々であり、当然それらの国々にナチスへの協力者がいたと見るべきである。ここでは同一社会集団内の少数者への優劣判断から生ずる排除原理に注目したい。事実、ナチスに思想的基盤を与えた「優生思想」は、日本ではつい最近まで法律という形で存続し続けたことには驚かされる。またナチズムは過去に死滅した思想ではないことも絶えず想起すべきであろう。日本において「優生保護法」という法律が廃止されたのは1996年のことであり、同年に少数者の社会隔離政策の典型ともいえる「らい予防法」が廃止されたことは、まだ我々の記憶に新しい。

**206.「市民の20世紀（10）第２次世界大戦」**〔1997年６月14日・NHK　50分、制作：BBC/WGBH／英米1995年“Peoples　Century ⑩ Total War”〕

第２次世界大戦では、子供たちも家族と別れて都市を離れた。空襲を避けるための疎開である。都会に残った母親たちは、最悪の事態を恐れた。自分たちが死んだら、誰が子供の面倒を見てくれるだろうか。ドイツは、彼らが「電撃戦（Blitzkrieg)」と呼んだ軍事行動によって、たちまちのうちにヨーロッパの町や村を飲み込んでいった。悪夢のようなあっけない敗北の後、フランスやポーランドではおびただしい「難民」が発生した。逃げだす難民たちにさえ、ドイツ軍の急降下爆撃機STUKA（シュトゥーカ）は、容赦なく襲いかかり、銃撃を加え爆弾を投下した。しかもSTUKAには、地上で避難しようとする人々の足をすくませるための心理的作戦として、耳をつんざくようなサイレンを鳴らしながら急降下してきた。　また、この世界大戦は、「女性の動員」という点でも特徴的である。彼女たちは、軍需工場を始めとして社会のあらゆる仕事に従事した。そしてこのことが戦後、女性の社会進出の足がかりになっていった

ことも事実である。都市の空襲は、軍事施設の破壊と同時に、市民の戦意を喪失させることも目的の一つであった。番組で紹介されるロンドン、ハンブルクそして東京における空襲に関する映像と生存者の証言は、戦争の記録ではなく、戦争を生きた市民の記録として貴重である。第2次世界大戦とは、子供も女性も否応なしに戦争という大量殺人の仕掛けの中に巻き込まれていった戦争であり、そしてそのことは、番組の原題「Total　War（総力戦）」が如実に示している。「総力戦」とは、勇ましく聞こえは良いが、要するにこれは戦場で殺し合う兵士ばかりではなく、銃後のすべての市民に死への覚悟を準備させる巧妙な国家的プロパガンダである点に注目しなければならない。

⇒関連映像資料：

207.「禁じられた遊び（"Jeux　Interdits"）」〔1952年・仏、監督・脚本：ルネ・クレマン〕

1940年6月、ドイツ軍が迫るパリから疎開する途中でナチス戦闘機の襲撃を受けて両親を殺された5歳の少女ポーレット。孤児となったポーレットを、近くの農家はいやいや受け入れる。農家の少年ミシェルはこの少女と仲良くなり、彼女の死んだ愛犬の墓を立てる。二人は、戦争の犠牲者のために次々と十字架を作っていくが、それは禁じられた遊びであった。＜モノクロ・86分＞

⇒関連映像資料：

208.「いちばん美しく」〔1944年・東宝〕監督：黒澤明　出演：志村喬、矢口陽子、入江たか子

太平洋戦争も末期に近い昭和19年（1944）、若い女性たちは、女子挺身隊の名前で各地の軍需工場に配属されていた。精密兵器のレンズを生産する東亜光学工業でも数十人の女子隊員が働き、寮で寝食を共にしていた。工場で非常増産強調運動が始まり、むこう4か月の目標割当が、男子10割、女子5割と出された。純真な女子隊員た

ちは自分たちから進んで男子の３分の２を申し出た。女子隊員をまとめる班長は目盛り修正室で働く渡辺ツル（矢口陽子）で、寮母の水島徳子（入江たか子）は彼女らを優しく見守っていた。やがて増産運動の中で彼女たちに様々な出来事が起きていく。増産に従事する女子徴用員たちの生活をドキュメンタリー・タッチで描いたドラマ。　黒沢明監督自らのアイデアによる作品で、戦意高揚のための国策映画的側面はうかがわれるものの、女子隊員たちの時代に正面から立ち向かう真剣さに対する黒沢の強い憧れが滲み出ている。観念的な失敗作という評価もあるが、黒沢監督自身は好きな作品の一本に上げている。太平洋戦争中の国民生活を描いた映画がきわめて少ないだけに、この映画で描かれる物語は大変貴重なものである言える。＜B&W　85分＞

**209.「市民の20世紀(11)冷戦の厚い壁」**〔1997年７月15日・BS１　50分、制　作：BBC/WGBH/英　米1995年、"People's Century ⑪Brave New World"〕

1945年４月25日〔水〕午後４時40分、ナチスドイツと戦った米軍とソ連軍は、ドイツ東部エルベ河畔の町トルガウ（Torgau）で歴史的な握手を交わす。東と西の出会いである。第二次大戦はヨーロッパで終結のときを迎えていた。結束してナチスの暴力と戦い勝利を収めた連合軍は、二つの異なる世界からきていた。米英仏という資本主義の世界と、ソ連という共産主義の世界である。瓦礫の山と化したかつてのヒトラーの都ベルリンで人々は生きるために必死であった。番組の冒頭では、瓦礫をひとつひとつ手渡しで取り除いているベルリンの女性たち、いわゆる「瓦礫女（Trümmerfrau)」の映像が映し出される。ベルリン市民は勝者である連合軍が二つの異なる勢力でできていることを知っていたし、自分たちの未来はどちらの勢力に組み入れられるかで大きく左右することも予感していた。しかも、ソ連軍占領地域では兵士による婦女暴行や集団レイプが頻

発していた。連合国の占領地域では自由選挙が約束されていたにもかかわらず、ソ連の支配地域ではすべて共産主義者が政治の重要なポストを占め着実に共産化が進められていた。そうしたソ連の非民主的な戦後政策は、やがてアメリカとの間に大きな亀裂を生むことになる。ソ連の人々はナチスというファシズムの打倒は社会主義にいたる一つのプロセスであり、その次に妥当すべきは米英などの「帝国主義」であると教えられた。戦争に勝利したアメリカは、再び物質的な豊かさを取り戻しつつあった。だが1946年の春訪米したイギリスの首相チャーチルは浮かれ気分のアメリカ人に冷や水を浴びせた。彼はウエストミンスター大学における演説の中でソ連の動向に警戒するように呼びかけた。（以下は記録映像の字幕を採録）

「今やシチェチンからトリエステにいたるまでヨーロッパには鉄のカーテン（Iron Curtain）が下がり、その向こうには中欧および東欧諸国の首都が取り込まれている。ワルシャワ、ベルリン、プラハ、ブダペスト。こうした都市とそこにすむ人々がすべて共産圏に暮らしているのである。」

ヨーロッパ大陸が鉄のカーテンで分断されているという生々しい描写は、西側社会のムードを一変させる。かつては西側の同胞として扱っていたマスメディアは一転してソ連を狡猾な暴君として描き始める。東側もマスメディアを総動員して西側諸国を非難し始める。こうして、戦後また新たに「メディアの戦争」が始まることになる。テレビが家庭に普及し始める当時の映像メディアの主流であったニュース映画の論調もプロパガンダの傾向を強めていくことになる。続いて番組は「ベルリン封鎖（1947）とそれに伴うベルリン大空輸作戦」「ハンガリー動乱（1956）」そして「ベルリンの壁構築（1961）」と、戦後の冷戦下の主な出来事を丹念につづっていく。◆現在、世界の各地で頻発する地域紛争の「前史」としての冷戦の歴史理解に格好の番組である。とりわけアメリカ、ソ連による相手側批判のた

めの最大のプロパガンダの武器となった劇映画、ニュース映画そしてテレビ番組の引用は、たとえ断片的であるにせよ、当時の空気を伝えるものとして貴重である。

**210.「市民の20世紀（12）ヨーロッパの復興」**〔1997年7月22日・NHK 50分、制作：BBC/WGBH／英米1995年、"Peoples Century⑫ Boomtime"〕

アメリカは戦後ヨーロッパの復興の一環としてまず大がかりな食料援助計画を実施した。戦争終結後の貧しい時代を生きた欧州の子供たちは十数年後に史上空前の経済繁栄の中に生きることになる。番組では、フランス、イギリスやイタリアの戦後の食料不足の悲惨な記録映像から始まる。1947年には近年にない厳しい冬がヨーロッパを襲った。政府の財政は破綻し、人々の期待は共産主義に集まる。130億ドルにのぼるアメリカのヨーロッパ復興計画（ERP）、いわゆる「マーシャル・プラン」は、ヨーロッパの共産化を恐れるアメリカの国策にもとづくものであることは否定できなかった。アメリカの動機はどうであれ、ヨーロッパに無償供与された大量のトラクターは農業の再生に貢献したことは否定できない。農業への支援と並行して欧州の工業復興も推し進められた。アメリカはドイツを東の共産圏に対する防波堤にしたいと考え、またヨーロッパ全体の工業の再生のためにもドイツの復興は不可欠であるとし、かつての敵国ドイツに多額の資金援助を行うことになる。当初アメリカの援助にかたくなな態度を示したフランスもアメリカの援助を受け入れざるを得なくなる。ヨーロッパそして敗戦国の日本は、経済復興の過程の中で「アメリカ生活様式」を理想とするようになる。物質的豊かさの象徴でもあるスーパーマーケットが初めてアメリカで開店したのは1950年代のことである。アメリカ経済の繁栄は大量に得られる安い石油と工場における大量生産方式であった。ドイツの経済は、戦後のヨーロッパの中で最も早く回復を示した。やがて一般家庭に

普及し始めるテレビは、それまでのラジオにとってかわるメディアとなり、テレビコマーシャルはいっそう人々の購買意欲をかきたてるものとなる。しかし経済的繁栄は産業基盤の整った都市部に集中していくのは否定できず、農村地域との経済格差はそれぞれの国で深刻な問題となったのも事実である。こうした事情は、戦後の日本の経済発展に伴ういくつかの現象と並行するものがある。アメリカのマーシャル・プランから始まったヨーロッパの復興は、1960年代には経済的自立にいたり、アメリカとの市場競争が始まる。労働力の不足したドイツでは、トルコなどから大量の「外国人労働者」(Gastarbeiter）を受け入れるまでになる。ヨーロッパの長い経済成長を支えてきたのは大量で安価の石油であったが、1973年にアラブ産油国が石油の値段を4倍にしたことで、ヨーロッパとアメリカが世界経済の中心になるという幻想は崩壊していく。世界には、依然として貧しい人々や国々が多数存在し、そこに住む人々による資本主義経済への異議申し立てはさまざまな形で現在もなお続いている。

**211.「自転車泥棒」**〔“Ladri　biciclette”〕　1948年・イタリア、制作・監督：ヴィットリオ・デ・シーカ、B&W　88分〕

第二次世界大戦後、イタリアン・ネオ・レアリスモ（新現実主義）の存在を全世界に知らしめた名作。戦後混乱する都会で唯一の商売道具の自転車を盗まれた父子が、丸一日かけてその行方を捜し歩く。その父子の目を通して戦後困窮するイタリア庶民の姿をリアルに描いている。

**212.－214.「シリーズ・ドイツ歴史教科書（1）ナチズムをどう語るのか～ポーランドとの対話　（2）社会主義とは何だったのか～旧東ドイツの問いかけ　（3）加害とどう向き合うのか～チェコの決断」**〔1997年8月4～6日・ETV・各45分〕

敗戦後のドイツが、ナチズムという過去の歴史を戦後教育の中でどのように扱ってきたのか、また東西ドイツ統一後の旧東ドイツ地域

における新たな歴史教育の抱いている問題、そして隣国チェコ共和国との間の戦争に係わる加害／被害の関係の清算の問題など、3つの視点からドイツの歴史教育の流れを検証する番組。

**（1）「ナチズムをどう語るのか～ポーランドとの対話～」**〔1997年8月4日・ETV〕

「ゲオルク・エッカート国際教科書研究所」は、ドイツの敗戦から6年後に設立された。ナチスを台頭させ、ヨーロッパ全土に多大な被害を与えたドイツは、その原因がドイツの「民族主義的」な歴史認識にあったと考え、二度と同じ過ちを犯さないために、被害を与えた国と対話し、その国のドイツに対する視点を自分たちの教科書に取り入れようとしてきた。中でも、戦争中600万人の犠牲者を出したポーランドとの対話は25年間絶えることなく続いてきた。ゲオルク・エッカート研究所には、世界70ヵ国13万冊に及ぶ歴史や地理、国語の教科書が集められている。この研究所は、各国の教科書について、それぞれ半世紀に渡り比較分析をしてきた。その中で、歴史教科書は、その国の体制を強化する道具としての役割を担わされ、歴史の事実を歪めたまま教育の現場に投影されてきた事実が浮上してきた。ドイツは、こうした研究所の調査と各国の歴史家との対話によって、自らの歴史認識を作ってきた。エッカート研究所は、ナチズムの狂気の根源は、民族を「優生／劣生」で分け、その価値観にもとづいて「一つの帝国、一つの民族、一つの総統（Ein Reich, Ein Volk, Ein Führer）」というナショナリズムを育て上げたことにあると指摘した。1945年5月8日、ドイツは敗戦を迎えた。経済の混乱、領土の縮小、ヨーロッパ全土から流入してくる「ドイツ人難民」、そして東西ドイツの分断国家という深い絶望感がドイツ全土を覆っていた。しかし、それ以上にドイツ国民はナチズムを支えた自らの罪をどう償い、ヨーロッパでどう生きていくのかという重い命題を抱えることにもなった。カント大学の歴史教授であったゲ

オルク・エッカートは、ドイツの再生のため、ナチズムによって歪められた過去と向き合い、教育の礎である歴史教育を再構築する必要があると考え、各国の歴史家との対話が始まった。ドイツの歴史家たちは民族的差別について15歳の生徒に教える教科書の中にこう記述した。

「ナチスの人種論にもとづいて『人種的に高等（rassisch wertvoll）』とされた民族と、『人種的に劣等（rassisch minderwertig）』な民族との間に想像を絶する残酷な事実が起きていた。ナチス親衛隊指導者の機嫌次第で人間以下（Untermenschen）の暮らしを強いられた。」

しかしながら、被害国の中で社会主義体制となった東ヨーロッパ諸国との対話は進まなかった。だがドイツの歴史教科書を意味のあるものにするためには、600万人もの犠牲者を出したポーランドとの対話はどうしても避けては通れない問題であった。歴史学者クラウス・ツェルナック教授は番組のインタビューでこう語る。「当時の西ドイツの国民は、西側諸国ばかりに目を向けていました。私たちドイツ人は自分たちのことを本当に理解しようとするためには、ポーランドの歴史家たちの助けを必要としていたのです。そのことを私たちはいちばん本質的な問題と考えていたのです。」ようやくポーランドの歴史家との対話が実現したのは、東西の冷戦の緊張が溶けつつあった1972年である。この年ドイツは総選挙で、それまで野党であったSPD（ドイツ社会民主党）が政権の座について、東側との関係改善を図る「東方政策」が始まった時期と重なっている。

◆歴史教育は自国の立場の正当化という動機から、ともすれば一国中心に陥りがちであり、言い換えるとそれは「ひとりよがり」な歴史理解になり、ひいてはそれがナチズムの台頭に繋がったと考えた。エッカートは、戦後の教育改革・教育の民主化の枠組みの中に、ドイツの周辺諸国の視点を導入しようと考えた点は注目に値する。

2002年サッカー・ワールドカップの日本・韓国同時開催を契機に、関係改善や文化交流が進んでいるかに思われるが、日本においても歴史教科諸問題についてはなんら解決されていないことを想起すべきである。

**（2）「社会主義とは何だったのか～旧東ドイツの問いかけ～」**〔1997年8月5日・ETV〕

旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）の第10学年では、東独の建国理念について次のように教えられてきた。

「1945年5月8日、ドイツ国民にとって新しい歴史の一歩が踏み出された。ファシストたちの暴力と弾圧から解放され、過去にけりをつけて新たな生活の基盤を作る機会を得たのである。進歩的で平和的な民主主義国家として、東ドイツは建国された。わが国の憲法は、民主的な変革において、革命的な成果に根ざしており、人民主権を保障する社会的基礎を築いたのである」

この考えには、少なくとも東独にはファシストの、すなわちナチスの残党は存在せず、彼らはすべて資本主義国の西独に逃亡したという含みが垣間見えている。そしてそのことにより、過去のナチス問題は東独では問われないという免罪符を得たといえる。だが1990年の東西ドイツ統一後の教科書では、ドイツ国民が克服すべき過去として、ナチズムと並んで東独の歴史が新たに付け加えられた。新しい教科書の一つには、次のような見出しの記述が見られる。

**‚Die DDR wird ein Gefängnis'（ドイツ民主共和国監獄となる）**

「社会主義統一党（注：旧東独の支配政党）は、国境線に監視塔・有刺鉄線・地雷を設けたにもかかわらず逃亡者は絶えなかった。1961年8月13日の朝、彼らは壁を建設した。ドイツ民主共和「国(東独)の全住民は社会主義統一党の統治と社会主義の生活に耐えなければならなくなった」－こうして、旧東独で歴史を学ぶ生徒はナチズムの否定と、彼らの親が生きた東独の二つの歴史を否定するという作

業を強いられることになった。1997年の6月、旧社会主義の8ヵ国の歴史学者が集まった。歴史の教科書の中で「社会主義」をどう記述するのかについて、これらの国の歴史学者は苦悩している。かつての東独の43年間の歴史は、ナチス時代の13年間の歴史と同様に、単純に「全面否定」されて、それで事足りるのか。また現在の歴史教科書は「東西両ドイツ統一」という名において、旧東独を合併した旧西ドイツの視点に偏りすぎていないのか。これは、いわゆる勝ち組の論理と負け組の論理が交錯する問題の一つともなっている。かくして戦後50年間にわたって分断国家として存在したドイツにとって、旧東独の社会主義体制が崩壊した現在、それを自国の歴史の一部として抱えこみながら、旧東独の歴史がどのように記述されるべきか、深刻な模索が続いている。

（3）**「加害とどう向き合うのか～チェコの決断～」**1997年8月6日・ETV〕

ドイツとの国境沿いの町ウースチー・ドラベム市はドイツ国境沿いの町である。ドイツが降伏した1945年の夏、この町を流れるエルベ川の鉄橋の上で、その後チェコ人とドイツ人との長い対立を生む悲劇が起きた。当時のチェコには人口の二割を占める310万人のドイツ人が住んでいた。戦争中はナチスによるチェコ人の強制労働やユダヤ人の迫害が行われていたが、敗戦とともに立場が逆転する。ドイツ人の強制的な立ち退きが迫られ、このときにドイツ人住民への暴力や迫害が行われた。1945年7月31日、ウースチー市に住むドイツ人も退去を迫られ、このときに事件がおきた。エルベ川にかかる橋に追い立てられたドイツ人は川から投げ落とされ、銃弾を打ち込まれたのである。もちろんチェコ人の報復感情が如何に強かったかは想像に難くない。それから45年後の1990年チェコ・スロバキア大統領ハベルはドイツのワイツゼッカー大統領をプラハに招き、そこでハベルは、歴史の中に封じられてきたドイツ人に対する迫害に責

任があることを認めた。このことについては、両国で多くの論議を引き起こした。ドイツの教育の現場では、チェコ側の加害性について、積極的に教える傾向が生まれ、チェコ側では、戦争当時の被害国がなぜ謝罪したのかという市民の強い反発を生んだ。番組では、52年を経て1997年にようやく和解したドイツとチェコとの間にはどのような歴史認識の違いが横たわっていて、それがどのように克服されていったのかについて、両国の歴史家のインタビューを交えて丹念に分析していく。問題の発端は、1938年の「ミュンヒェン会談」にさかのぼり、いわゆる「ズテーテン地方併合問題」から始まる。

関連新聞資料⇒「朝日新聞」2002年２月22日・朝刊。

「ドイツとチェコ　和解宣言を確認、フィッシャー外相は20日、プラハを訪問し、チェコのゼマン首相と会談後、「欧州連合（EU）の中東政策を強く支持する首相の言葉を受け入れる」と述べた。ゼマン首相はパレスチナ自治政府のアラファト議長をヒトラーになぞらえたと報道されたが、ドイツ側は発言を否定したゼマン氏に理解を示した。ゼマン氏は先に、ナチス・ドイツに併合されたズテーテン地方から戦後チェコが追放した250万人以上のドイツ人についても「ヒトラーの追随者」と発言、独側が反発した。両国はこの日、双方の過去の和解を求めた97年の宣言を確認。問題は解決済みとした。」

**215.「オペラ『忠臣蔵』」**〔1997年８月10日・『芸術劇場』・番組案内：細川俊之・ETV・３時間30分〕

オペラ「忠臣蔵」は５月14日夜、東京文化会館で初演の幕を開けた。（毎日新聞社、オペラ「忠臣蔵」実行委員会主催）これは作曲家・三枝成彰氏の構想10年の大作で「忠臣蔵」の題材がオペラになるのは初めてである。三枝氏は討ち入りを「組織に忠誠を尽くす現代日本人の意識構造の原点」と見る。三枝氏が、上演する機会の多い約40曲のオペラの共通点として指摘するのは、「自己犠牲」が描かれ

ていること、大悪人が出てこないことの2点である。台本は作家の島田雅彦氏。演出を担当したのは、ドイツの映画監督ヴェルナー・ヘルツォークで、彼は「ドイツの中世にも忠臣蔵に似たような話があり、死の意識に日本人と合い通じるものを感じる」と語っている。

**216.「消えたユダヤ人資産～問われるスイスの戦争責任～」**〔1997年10月31日・ETV、制作：BBC／英・1997年・45分〕

第2次世界大戦の始まる前、ヒトラーの台頭に恐れを抱いたユダヤ人は、その資産をスイスの銀行に預け入れた。ユダヤ人はさまざまな方法で金や宝石を密かに隠し持ってスイスに逃れてきた。この機に乗じてスイスの銀行は莫大な預金を獲得した。預金者の身元を決して明かさないというスイスの銀行法は、多くのユダヤ人を引きつけたのである。そして何十億ドルというヨーロッパの金がスイスに流れ込んだ。そこが唯一安全な場所と思われたからである。戦後、スイスの銀行はユダヤ人の多くが殺されたことを知り、返還に応じる気はなかった。ホロコーストをかろうじて生き延びた人々も高齢化しており、死んでしまえばもうお金は返してもらえず、銀行の勝ちになる。しかしながら、アメリカのユダヤ人団体は返還訴訟を開始した。長い間隠されてきたスイスの闇の歴史が、少しずつ明るみに出されようとしている。ユダヤ人生存者の一人E・T・グロチさんの証言で番組は進む。彼女は、スイスの銀行家ら家族の正当な財産を取り戻すことに生涯をかけてきた人々の一人である。彼女が返還を求めた時、スイスの銀行は収容所で亡くなった家族の「死亡証明書」の提出を要求してきた。強制収容所で何が行われていたかを知っていたにもかかわらずである。個人の力では限界があり、アメリカのユダヤ人団体は200億ドルの返還訴訟を起こしスイスに乗り込んだ。代表のE・ブロンフマンさんは、アメリカ政府にも強く働きかけた。ユダヤ系のロビイスト(院外団体)がアメリカの政治に強い影響力を持っていることは良く知られている。この団体は、1997

年１月アメリカに逃げてきたスイスのある銀行の警備員Ｃ・メイリ氏を保護した。彼は、ナチスに関する文書を銀行が焼却処分しようとしているのを目撃、その一部を持ち出したのだった。スイスの銀行は、物的証拠の存在で次第に追い込まれ、また語られたくない過去の歴史も次第に白日のもとにさらされていく。スイスのナチス党も反ユダヤ主義であり、さらに戦前のスイス政府は、スイスのユダヤ化を食い止める決議もしていた。ユダヤ人のパスポートにはユダヤの頭文字の「J」のスタンプを押すようにドイツに要請していた。やがてスイスもユダヤ人にとって安住できる国ではなくなった。番組では、この後大戦中スイスの軍需産業がナチスに協力的な姿勢を取ってきた経緯がかなり具体的に紹介される。ヨーロッパ各地から持ち込まれた金塊で、ドイツはスイスで戦費を調達した。金塊は、収容所の中でユダヤ人の口から無理やりもぎ取った金歯を集めて溶かしたものである。ドイツ・マルクは国外では通用しなかったので、金塊はマルク以外の貨幣に換金された。同時に、スイスはユダヤ人難民の受入れを拒絶し、強制的にドイツかまたはフランスに送られた。フランスに着くと、そこにはナチス親衛隊が待ち構えていた。スイスが受入れを拒否したユダヤ人の多くは、その後ポーランドのアウシュヴィッツで悲惨な死を迎えることになる。戦後ドイツの産業は、スイスに隠しておいた資金のお陰で、すばやく立ち直り、ドイツ経済は奇跡の復興を遂げた。しかし、ホロコーストの犠牲者となったユダヤ人への補償はようやく始まったばかりである。ユダヤ人団体の圧力に屈し、スイスの銀行は２億スイスフランの基金を設立。これはホロコーストの犠牲者への返済に当てられることになる。また同時に犠牲者に銀行預金とナチスの金塊についての調査委員会も作られることになった。1997年10月29日、スイス銀行協会はユダヤ人「休眠資産」の２回目の名簿公開を行った。

**217.「旧東ドイツの市民の心は～東西ドイツ統一から７年～」**〔1997

年10月5日　『ニュース・プラス1』・TeNY（日本テレビ系列）・約4分〕

人口10万人の旧東ドイツの都市デッサウ（Dessau）で取材された旧東ドイツ市民の様子を取材。統一から7年後、かつて1960年代の東独で「ビートルズ」と呼ばれた「スプートニクス」が30年ぶりに再結成された。ちなみにスプートニクスとはソ連初の人工衛星の名前であり、東ドイツなどソ連周辺の共産圏諸国は「衛星国」と呼ばれた。統一から7年が経過してもなお、統一の当初期待されていたような経済状況の改善が見られない中、次第に市民に統一への不満が出てくる中で、市民はかつて存在した国家すなわちドイツ民主共和国に対してある種のノスタルジーすら感じ始めているようである。その典型的な事例がしばしば市民が開催する東独時代の生活を懐かしむパーティーで、これは「東」(Ost) と「ノスタルジー（Nostargie)」をもじって「オスタルギー・パーティー」と呼ばれている。こうした市民活動で問われているのは、東ドイツという国家の存在は、はたして全面否定が可能かどうかということである。たとえそれが国民の人権を抑圧した国家であったにせよ、その中で精一杯生きてきた市民が、過去に懐かしさを覚えるとしても、われわれはそれを単に保守的回帰思考と捉えるべきではないだろう。日本人の高齢者においてもなお戦前・戦後の時代を心底懐かしく思う人は少なくないはずであるから。

**218.「君よ知るや南の国～文豪ゲーテとデューラーのイタリア紀行～」**〔1997年10月5日『素晴らしき地球の旅』・BS1・90分〕

「君知るや南の国　レモンの花咲き　黄金なすレモン・・・」－かつて、ゲーテは南の国イタリアへの熱い思いをこの「ミニヨンの歌」に託した。16世紀ドイツの画家デューラーも、イタリアに強くあこがれ、険しいアルプスを越えてイタリアへの旅に出た。詩人と画家、300年の時空を超えた二人の芸術家のイタリアへの旅をめぐり、ド

イツ文学者池内紀と版画家山本容子（1952－）は、その足跡をたどる旅に出る。〔番組で引用される映像：ワイマールの国立劇場広場に立つゲーテとシラーの銅像、ワイマール市役所広場のデューリンゲン名物の焼きソーセージ（Bratwurst）の屋台、ゲーテハウス、ワイマール城〕。二人の旅は、ドイツ・テューリンゲン州の歴史的古都ワイマールから始まる。1749年、フランクフルトの上流階級の家に生まれたゲーテは、1775年ワイマール公国の大公カール・アウグストに招かれ、26歳でワイマールの地で政治の要職につくことになる。このころ彼は「若きウェルテルの悩み」で、すでにヨーロッパ中に名を知られた作家であった。人妻シュタイン夫人との恋愛や政治家としての多忙な生活の中で、文学創作上の行き詰まりを感じたゲーテは、36歳の時に偽名を使ってひそかにワイマールを抜け出し、自らの人生と芸術の再生をかけてイタリアへと向かう。アルブレヒト・デューラー（1471－1528）も、イタリアへの旅で、画家としての才能を一気に開花させた。中世の時代に神聖ローマ帝国皇帝の居城が置かれていたニュルンベルクで、金銀細工師家に生まれ、彼が修行を続けていた15世紀後半の時代においては、ドイツの画家のイタリア旅行は前代未聞のことであった。そんな中でデューラーは一人南の国を目指す。1494年23歳のデューラーは新婚の妻を一人残してベネチアへと旅立つ。彼は未知の国イタリアに自由と新しい表現の可能性を見出していた。15世紀末のデューラーは徒歩で、それから300年後ゲーテ馬車でアルプスを越えていく。番組ではワイマールを出発した池内と、ニュルンベルクから出発した山本の二人は、オーストリアのインスブルックで合流し、そこから古来イタリアとドイツをつなぐ要路であるブレンナー街道に沿ってレモンの花咲く国イタリアへと入っていく。

**参考文献**

吉田　和比古「ハイパーテクストとしての『言語』と『映像』」「新潟大学教養部研究紀要」第25集　65－77ページ　1993年。

吉田　和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部〕第2号1－14ページ、1996年。

吉田　和比古「メディア、あるいはファシズム　（1）レニ・リーフェンシュタール論～」「法政理論」新潟大学法学会　第30巻　第2号　1－27ページ　1997年。

吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～（1）ドイツ戦後史の映像レファレンス～」「法政理論」新潟大学法学会　第33巻　第2号　66－150ページ　2001年。

吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～（2）過去をまなざしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～」「法政理論」新潟大学法学会　第34巻　第1／2号　22－61ページ　2001年。

吉田　和比古「都市の記号論（2）ベルリン：日本のマスメディアのまなざし～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部〕第8号167－180ページ、2002年。